

勝龍寺

寺伝によると、806年、真言宗の開祖である空海（774年～835年）が、自らが仏教を学んでいた中国の寺院の名をいただき、青龍寺を建立しました。962年にひどい干ばつに見舞われたとき、天皇は住職の千観（918年～984年）に1週間雨乞いをするよう命じました。そうしたところ、待ちに待った雨が降り、水を司る竜神の意志を祈りの力で打破したという意味から、寺号を「勝龍寺」という文字に変えました。

本堂と境内

入口にかかっている龍の形をしたしめ縄は、龍が西方にある西山へ向かって飛んでいく様子を表しています。しめ縄は、地域の人々が新年を迎える度に手作りしていて、かつては、その出来栄によって農作物の豊凶を占っていたとされています。勝龍寺の本尊は、慈悲の菩薩である十一面観音菩薩の立像です。鎌倉時代（1185年～1333年）に作られたもので、国の重要文化財に指定されており、特別な公開期間以外は京都国立博物館で保管されています。本堂は通常非公開となっておりますのでご注意ください。

境内には、開祖空海が全国を行脚した時の姿や認知症を予防するほけ封じ観世音、七福神の一人である布袋、そして具合の悪いところをなでて祈願すると病が治るといわれる賓頭盧尊者などの像が安置されています。また、境内の小さな春日神社には勝龍寺地区の氏神が祀られています。

アートとコミュニティとの関わり

勝龍寺は、複雑に紙を切って絵を描く「切り絵」で知られており、切り絵の御朱印（参拝を証明する手書きの証書）、お守りなどを提供しています。また、寺院のスタッフによる切り絵のワークショップやヨガのクラスも開催しています（予約制）。1月と8月を除く毎月第2日曜日には「ほてい市」が開催され、近隣の人々が手作りの食品、工芸品、環境に優しい商品を販売するほか、ミュージシャンのミニライブも開催されます。